

編集
鈴木一彦
林巨樹

編集
協力

飯田晴巳
猿田知之
中田緑朗

助辞編(三)
助詞・助動詞辞典

研究資料日本文法⑦

明治書院

編 者

鈴木 一 彦 (すずき かずひこ)

林 巨 樹 (はやし おおき)

研究資料日本文法 第7巻

助辞編(三) 助詞・助動詞辞典

創業88周年記念
特別定価 2,800円

昭和60年4月25日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明 治 書 院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明 治 書 院

〒101 東京都千代田区神田錦町 1-16

電話 東京 (292) 3741 (代)

振替口座 東京 3-4991

© K. Suzuki 1985 3381-26607-8305 製本 星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辭論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにつとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を巡ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。

十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実に、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木 一彦
林 巨樹

凡 例

1 この辞典は、日本語の助詞・助動詞を古典語を中心に、さらに現代語をも可能な限りひろい範囲にわたって取り上げ、その意味・用法を詳説したものである。

2 本書では、「助動詞総覧」「助詞総覧」の下に、次のような分類にまとめた。

○助動詞

1 断定・否定 2 推量 3 過去・完了 4 敬讓 5 願望・比況・伝聞 6 自発・受身・可能・使役

○助詞

1 格助詞 2 接統助詞 3 副助詞 4 係助詞 5 終助詞・間投助詞

3 右の分類に従って、それぞれの定義や学説、さらに語選択の理由などを初めに概説した。

4 見出し語の下に、古典語・現代語の別、種類名などを次のように示した。

なり (㊦) 断定) 〓 古典語の断定の助動詞

ない (㊦) 否定) 〓 現代語の否定の助動詞

つ (㊦) 格助詞) 〓 古典語の格助詞

ば (㊦) 接統助詞) 〓 現代語の接統助詞

5 見出し語ごとに、代表例／活用表(助動詞)／接統／意

味・用法／考究などの項目別に記述し、その語の特性を明らかにした。

6 用例はなるべく時代別に適切な作品から選び、特に上代語の場合には原文の漢字表記をも添えた。和歌などの場合、原則として国歌大観番号を付した。

7 [接統]は、代表的な形式と思われるものを①……②……で示し、特例などは※を付して解説するようにした。

8 [意味・用法]について多義にわたる場合は、■……■……に分けて論及した。さらに、詳説する必要があるときは、↓考究として[考究]欄で補った。

9 [考究]欄では、語誌(語源を含む)・変遷・学説上の問題点・読解上の留意点・類似語との識別等について詳しく言及した。代表的学説はもちろんのこと、異説・新説等にも可能なかぎり論及し、研究の現状を示すよう努めた。各項の区切りは◆印で示したが、読解上の留意点・類似語との識別の項は利用の便を考えて特立した。

10 巻頭に、分類に所属する語についての目次を置き、さらに巻末には各語についての五十音順の一覧表を付して、索引の便を図った。

執筆者紹介

① 生年月日 ② 卒業校 ③ 専攻 ④ 現在

岩 淵 匡(いわぶち ただす) ① 昭和12年1月21日 ② 早

稲田大学大学院 ③ 国語史 ④ 早稲田大学教育学部教授

武 田 孝(ただた こう) ① 大正11年12月27日 ② 東京大

学国文学科 ③ 国語学 ④ 和光大学人文学部教授

岡 本 勲(おかもと いさお) ① 大正12年4月1日 ② 京

都大学大学院 ③ 国語学(近代文語・文章文体論・日本漢字

音) ④ 中京大学文学部教授

川 岸 敬子(かわぎし けいこ) ① 昭和25年9月15日 ② 早

稲田大学大学院 ③ 国語学(敬語史) ④ 十文字学園女子短

期大学講師

今 西 浩子(いまにし ひろこ) ① 昭和14年2月24日 ② 京

都大学大学院 ③ 国語学 ④ 横浜市立大学助教授

外 山 映次(とやま えいじ) ① 昭和8年8月20日 ② 東京

教育大学大学院 ③ 国語史(中近世) ④ 埼玉大学教授

沖 森 卓也(おきもり たくや) ① 昭和27年7月20日 ② 東

京大学大学院 ③ 国語学 ④ 百合女子大学助教授

阿 部 八郎(あべ はちろう) ① 昭和18年8月15日 ② 国学

院大学大学院 ③ 国語学 ④ 山形大学人文学部助教授

高 瀬 正一(たかせ しょういち) ① 昭和27年8月21日 ② 九

州大学大学院 ③ 国語学 ④ 愛知教育大学助教授

細 川 英雄(ほそかわ ひでお) ① 昭和24年1月3日 ② 早

稲田大学大学院 ③ 国語学 ④ 信州大学教育学部助教授

小 倉 肇(おくら はじめ) ① 昭和22年1月6日 ② 国学

院大学大学院 ③ 国語史 ④ 弘前大学教育学部助教授

研究資料日本文法

全10巻

編集 鈴木一彦・林巨樹

創業八十八周年記念出版

特別定価 各二八〇〇円

過去の文法學説をふり返りつつ、語論・構文論・敬語論・修辭論等、各分野にわたって新しい視点から問い直す新シリーズ。過去の重要な基本資料も注解して紹介したほか、文法上の諸問題を提示解明。

好評完結！

全10巻の構成

▼内容見本呈

① 品詞論・
体言編 代名詞 発売／

② 用言編(一) 動詞 発売／

③ 用言編(二) 形容動詞 発売／

④ 修飾句・
独立句編 副詞・連体詞 発売／
接続詞・感動詞

⑤ 助辞編(一) 助詞 発売／

⑥ 助辞編(二) 助動詞 発売／

⑦ 助辞編(三) 助詞・助動詞・辞典 発売／

⑧ 構文編 発売／

⑨ 敬語編 発売／

⑩ 修辭法編 発売／

A5判 平均三三〇頁 箱入

明治書院

助動詞総覧

1 断定・否定の助動詞

岩淵

匡

なり〔古典語〕

..... 3

たり〔古典語〕

..... 4

あり〔古典語〕

..... 5

だ〔現代語〕

..... 7

じゃ〔ぢゃ〕〔現代語〕

..... 9

〔で〕ある〔現代語〕

..... 10

ず〔古典語〕

..... 12

ざり〔古典語〕

..... 13

なふ〔古典語〕

..... 15

ない〔現代語〕

..... 15

ぬ〔ん〕〔現代語〕

..... 17

2 推量の助動詞

武田

孝

む〔ん〕〔古典語〕

..... 20

3 過去・完了の助動詞

岡本 勲

き〔古典語〕

..... 49

むず〔んず〕〔古典語〕..... 22

らむ〔らん〕〔古典語〕..... 23

けむ〔けん〕〔古典語〕..... 25

めり〔古典語〕..... 27

らし〔古典語〕..... 28

べし〔古典語〕..... 30

べらなり〔古典語〕..... 32

まし〔古典語〕..... 33

じ〔古典語〕..... 35

まじ〔古典語〕..... 36

ましじ〔古典語〕..... 38

なり〔古典語〕..... 38

う〔現代語〕..... 40

よう〔現代語〕..... 42

らしい〔現代語〕..... 44

まい〔現代語〕..... 45

4

けり〈古典語〉		53
つ		55
ぬ		59
たり〈古典語〉		60
り		62
た		63
なんだ		64
敬讓の助動詞		66
たまふ(四段)〈古典語〉		67
たまふ(下二段)〈古典語〉		69
待り〈古典語〉		70
候ふ〈古典語〉		72
まらする〈古典語〉		74
まする〈古典語〉		75
やんす〈古典語〉		76
やす〈古典語〉		76
ます〈現代語〉		77
です〈現代語〉		78

5

ございます〈現代語〉..... 80

願望・比況・伝聞の助動詞 今西浩子..... 82

まほし〈古典語〉..... 83

たし〈古典語〉..... 84

まうし〈古典語〉..... 85

たい〈現代語〉..... 85

たがる〈現代語〉..... 86

ごとし〈古典語〉..... 87

ごとくなり〈古典語〉..... 89

やうなり〈古典語〉..... 90

さうな〈古典語〉..... 91

ようだ〈現代語〉..... 92

そうだ〈現代語〉..... 94

なり〈古典語〉..... 95

げな〈古典語〉..... 96

そうだ〈現代語〉..... 97

自発・受身・可の助動詞 外山映次..... 98

6

1

る	〈古典語〉		99
らる	〈古典語〉		101
ゆ	〈古典語〉		102
らゆ	〈古典語〉		104
れる	〈現代語〉		104
られる	〈現代語〉		106
す	〈古典語〉		107
さす	〈古典語〉		109
しむ	〈古典語〉		110
せる	〈現代語〉		112
させる	〈現代語〉		113
助詞総覧			
格 助 詞			
つ	〈古典語〉		117
の	〈古典語〉		117
が	〈古典語〉		119
な	〈古典語〉		121
を	〈古典語〉		122
沖 森 卓 也			

2

に	〈古典語〉		124
へ	〈古典語〉		125
と	〈古典語〉		126
ゆ	〈古典語〉		128
ゆり	〈古典語〉		129
よ	〈古典語〉		130
より	〈古典語〉		131
から	〈古典語〉		132
にて	〈古典語〉		134
とて	〈古典語〉		135
して	〈古典語〉		136
もて	〈古典語〉		137
や	〈古典語〉		138
い	〈古典語〉		139
で	〈現代語〉		140
接続助詞			
ば	〈古典語〉		142
とも	〈古典語〉		144
阿 部 八 郎			

と	〈古典語〉	145
ど	〈古典語〉	146
ども	〈古典語〉	148
いへども	〈古典語〉	149
が	〈古典語〉	150
も	〈古典語〉	153
ものから	〈古典語〉	153
ものゆゑ	〈古典語〉	155
ものの	〈古典語〉	155
ものを	〈古典語〉	156
に	〈古典語〉	158
て	〈古典語〉	159
さかひ	〈古典語〉	161
から	〈古典語〉	161
を	〈古典語〉	162
して	〈古典語〉	164
で	〈古典語〉	165
つつ	〈古典語〉	167
ても	〈古典語〉	168

や	〈古典語〉	169
たり	〈古典語〉	170
ながら	〈古典語〉	171
し	〈古典語〉	172
ば	〈現代語〉	173
も	〈現代語〉	174
て	〈現代語〉	175
ても	〈現代語〉	176
が	〈現代語〉	177
と	〈現代語〉	178
ところが	〈現代語〉	179
ところで	〈現代語〉	180
どころか	〈現代語〉	180
けれども	〈現代語〉	181
から	〈現代語〉	182
ので	〈現代語〉	183
もの	〈現代語〉	183
もので	〈現代語〉	183
ものなら	〈現代語〉	184

3

ものの(現代語)	184
に(現代語)	185
のに(現代語)	185
し(現代語)	186
つつ(現代語)	187
たり(現代語)	187
ながら(現代語)	188
や(現代語)	189
副 助 詞	190
し(古典語)	191
しも(古典語)	192
ばかり(古典語)	192
のみ(古典語)	193
まで(古典語)	194
など(古典語)	195
だに(古典語)	196
すら(古典語)	197
そら(古典語)	197
高 瀬 正 一	190

4

やらむ(やらん)(古典語)	196
さへ(古典語)	198
ばし(古典語)	199
だけ(現代語)	200
くらい(くらい)(現代語)	201
ばかり(現代語)	201
きり(現代語)	202
ずつ(現代語)	202
でも(現代語)	203
しか(現代語)	203
ほか(現代語)	204
やら(現代語)	204
ほど(現代語)	204
なり(現代語)	205
係 助 詞	206
そ(そ)(古典語)	207
なむ(なん)(古典語)	209
なも(古典語)	210
細 川 英 雄	206

5

終助詞・間投助詞

小倉

肇

な——そ〈古典語〉

226

な¹〈古典語〉

227

な²〈古典語〉

227

な³〈古典語〉

228

なむ(なん)〈古典語〉

228

こそ〈古典語〉

211

や〈古典語〉

213

やは〈古典語〉

214

やも〈古典語〉

215

か〈古典語〉

215

かは〈古典語〉

217

かも〈古典語〉

217

も〈古典語〉

218

は〈古典語〉

219

は〈現代語〉

221

も〈現代語〉

223

こそ〈現代語〉

224

しか〈古典語〉

230

てしかな〈古典語〉

230

にしかな〈古典語〉

231

もが〈古典語〉

231

もがも〈古典語〉

232

もがな〈古典語〉

232

がな〈古典語〉

233

ばや〈古典語〉

233

か〈古典語〉

234

かも〈古典語〉

235

かな〈古典語〉

236

かし〈古典語〉

236

も〈古典語〉

237

は〈古典語〉

238

に〈古典語〉

238

ね〈古典語〉

239

がね〈古典語〉

239

がに〈古典語〉

240

な・なあ〈現代語〉

240

な	〈現代語〉	241
い	〈現代語〉	241
よ	〈現代語〉	242
か	〈現代語〉	242
とも	〈現代語〉	243
ぜ	〈現代語〉	243
さ	〈現代語〉	244
わ	〈現代語〉	244
の	〈現代語〉	245
ものか(もんか)	〈現代語〉	245
や	〈古典語〉	246
よ	〈古典語〉	247
を	〈古典語〉	248
ゑ	〈古典語〉	249
ろ	〈古典語〉	249
ね・ねえ	〈現代語〉	250
語彙項目一覧表		251

助
動
詞
總
覽

1 断定・否定の助動詞

岩 淵 匡

主概念と賓概念とが、論理的、客観的に結びついていて時、その妥当性を話し手が確認することを表すのが断定（指定）の助動詞である。一般には、「なり」「たり」「だ」をあげ、文法的立場の違いによりこのほかのものもあがる。ここでは、右のほかいわゆる存在詞「あり」（で）ある」と、中世以降あらわれた「ぢゃ（じゃ）」を断定の助動詞とした。もちろん、「です」をはじめ、断定を表すものは右以外にもあるが、それらは含めないことにした。

一方、否定（打消）の助動詞は、論理性、客観性もち、本来は物の存在しないことを表すが、一般には肯定でないことを表すものである。否定も断定の一種であり、肯定の否定を単に断定、否定の否定を単に否定ということが多い。

否定の助動詞としては、「ず」「ない」が一般的であるが、ここでは「ず」の補助活用「ざり」を特に立てたほか、上代語の「なふ」、現代語に見える「ぬ」をあげた。「まじ」「まい」などの打消の推量を表す助動詞も本来否定であるが、ここでは、一般の考え方に従い、否定の助動詞とはしない。

断定・否定の助動詞に何を含めるかは、助動詞をどう考えるかによって異なる。大雑把に見れば、山田孝雄・橋本進吉・時枝誠記らの立場の違いによって代表させることができる。例えば、「あり」について見れば、山田孝雄は存在詞として、いわゆる助動詞とは別の扱いとし、橋本進吉は補助動詞、時枝誠記は断定の助動詞とするという具合である。山田孝雄は「あり」と熟合してできた語も存在詞とし、時枝誠記は「に」「と」「の」も否定の助動詞とするなどの特徴を見せている。

なお、断定・否定の助動詞は、断定や否定以外の用法も持つ。このうち、終助詞的に使われたものについて、金田一春彦は不変化助動詞としている。